

氏名	山田 麻緒
ヨミガナ	ヤマダ アサオ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第607号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 制約の中から生まれる美―「ふたかた（二型）」技法による染色表現 〈作品〉 Acinonyxes -開示- Acinonyxes -深層- 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	上原 利丸
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	橋本 圭也
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藤原 信幸
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

これは工芸研究領域（染織）の博士後期課程の研究目的と制作テーマについて詳述した論文要旨である。本論文は、約80年前に消失した幻の染色作品・高砂染に見られる「ふたかた（二型）」の染色技法と、技法を踏襲した型染による自作品を制作し、自我を映す女性像の変容と解体と再編の過程を辿る内容とする。

本論文の研究目的は、消失した染色文化の蘇生と、蘇生した技法を自作品における芸術表現として組み込むことで、従来の型染技法では不可能のうちにあった表現を実証し、消失した伝統の染色文化と個人の創作が交差する中で生まれる表現としての可能性を見出すことである。

染織作品は布をはじめとした繊維質のものであり、その材質は時間的、環境的要因への耐久性に乏しく脆弱である。残存することが難しい染織作品の中には、今日では物質とともに消失した染織技法がある。染織史において消失の危機に見舞われた技法は多く、今日では代表的な型染技法の一つとして一般に広く知られる沖縄県の「紅型」も、政治的背景により過去に二度の消失の危機があった。本論文の研究対象とした「ふたかた（二型）」は、かつては繁栄したものの経済的、環境的な理由で自然消滅した「高砂染」にみられる染色技法である。消失した二型技法を、芸術表現としての一面を構えるものへと転換する。

現在の型染技法の原型と認められるものは、鎌倉時代末頃のものとは推定される籠手に見られることから、技法はすでに完成してから約一千年経つと考えられている。日本の長い染織史の中で洗練された技を誇る型染文化の中で、一作家に未踏の表現領域が残されているとは考え難い。以前より私は自作品にオリジナリティを求めて、異なる図柄を二枚の型紙を分け、布上で合成し、かたちの積層を表出するといった手法に取り組み、それを「多重染」と自称していた。しかし、研究調査を進めるうちに、この手法はまさに現存する高砂染に確認できる伝統的な染色技法に類似するものであったということがわかった。慶長6年ごろにはすでに姫路地域内で発生し、その後一部の藩で繁栄した後、昭和初期に消失した高砂染の歴史を辿ると、日本の土壌で育まれた染色文化が現代まで正確性を持って継続してきたこと自体が奇跡的であり、価値があるという考えに至った。本論文では高砂染に確認できる伝統的な二型技法が、自作品のコンセプトを表現するに最

も適した技法であり、芸術表現として捉えていることを詳述する。

本論文の構成は、はじめに、第一章、第二章、第三章、第四章、おわりに、参考文献等の項目に分け、それぞれの文頭に明示する。章立ては型染について技法的観点から詳述する章と、自作品のテーマを語る個人性の強い章で構成・展開するものとなる。

第一章では、女性（自我）の変容と解体と再編を「複合（Complex）」というキーワードに基づいて、イメージの起源を詳述する。私が女性をモチーフとした染色作品の制作を重ねてきた根幹には、「女性＝乱調な幻影」という女性観がある。経験の中で醸成された女性像が一連の表現行為を通してどのように表出されているか、過去作品を振り返りながら詳述する。

第二章では、日本の染織史における型染の起源と発展、技法的特色を述べ、姫路地方に伝わる「高砂染」を例に挙げ、本論文の研究技法である二型技法の特殊性と、現代に蘇生した高砂染の芸術的価値についての見解を述べる。

第三章では、自作品の制作プロセスにおける行為の意味についてを、自作の型染作品の一連の工程順に沿って詳述し、一章で詳述した個人的な女性観と、二型の染色技法との関連性を詳述する。

第四章では、博士審査提出作品のコンセプト、作品概要、制作工程についてを詳述する。博士審査展提出作品のモチーフであるオリジナルの半獣人「Acinonyx」は、個人性に満ちた生命体の姿態である。名称の由来となった「Acinonyx Jubatus」とはチーターの学名であり、直訳すると「引っ込められない爪を持つ者」の意味である。チーターの身体的特徴を示唆するこの学名の由来は、私の女性観の主幹にある両価的な混沌性に結びつくものと解釈する。

おわりに、の章では各章の考察をもとに、二型の染色技法を用いた自作品の特徴、独自性の在処を述べて本論文のまとめとする。

（論文審査結果の要旨）

いちがいには言い難いものの、日本工芸の世界は明るく自然美を謳うものが多く、80年代以後のジェンダーをテーマとした作品群においてもその根幹は同様に思われる。山田氏の作品は、それらに静かに抗うように、ほの暗い翳りのなかで、時としてからみつくような女性性を静かにつぶやく。

提出論文の構成は4章からなる。第1章においては、発想の源を明らかとするため、生育過程における実姉や母、友人との関係性の変化と、単一の女性像からAcinonyxesという複合的なイメージに至るまでを論じている。第2章においては兵庫県姫路市に伝わる「高砂染」の歴史と技法の特性を論じつつ、つづく第3章では「高砂染」と自身の二型技法との比較、さらには女性観との関わりについてが述べられる。第4章では、谷崎純一郎『陰翳礼讃』のなかの「翳り」をキーワードに博士提出作品のコンセプトや制作工程などが論じられる。全体を通じて放たれるメッセージは、同氏自身が自らの内面とその女性性を客観視し、肯定していく姿でもある。

論文指導において、実姉や友人との関係性に端を発する感情のもつれ、ほの暗さ、性の合間をただようような同氏の作品世界について、早々と論文に仕立てていくことはかえって意味をなさないであろうと判断した。そこで過去と現在を交錯する様々な想いを断片的に書き溜めていくことを提案した。結果としてみれば、同氏自身の思考と感情の整理につながり、論文執筆と制作が良好な関係で展開していったと考える。内省的な表現がどこか等閑視されがちな工芸の世界において、さらには女性がネガティブな自身の性を肯定的に表現することにおいて、同氏の思考プロセスが如実に記された本論文は意義をもつものである。

以上のように論文が作品の背景を十分に説明するものであること、工芸における女性性の表現の在り方を新たに提示したものとして、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

（作品審査結果の要旨）

型染技法は、鎌倉時代末頃に完成した染色方法で、基本的には自由な形に彫られた型を用い、糯米と小紋糠を主剤とする糊を色素（染料）の浸透を防ぐ防染剤として布に置き染色後に糊を洗い流す方法と直接染料

や顔料を刷り込むことで色をつける方法がある。山田麻緒氏の作品の技法的な特徴は、前者の方法の応用で研究題目にある型染めを二度重ねて繰り返す「ふたかた（二型）」技法が画面の大半を占め、一部に後者の方法が見られることである。

作品は、赤を基調とした右隻（Acinonyxes-開示-）、黒を基調とした左隻（Acinonyxes-深層-）の四曲二隻の屏風で構成されている。モチーフは、オリジナルの半獣人「Acinonyx」が使われており、チーターの学名である「Acinonyx Jubatus」から由来し、直訳すると「引っ込められない爪を持つ者」を意味する。このモチーフの作品における扱いは、人間の女性像と区別はないが自我という観念的なものを擬人化したものであり、全身の形状をあえて見せず隠すことで見る側のイメージや想像を掻き立てるフォルムとなっている。型を彫り表出されるそれぞれのラインは、独自性というよりもイラスト的な印象が拭えないが、一本の境界線で表現する緊張感により、まさに「制約の中から生まれる美」にふさわしい表現法であると言える。画面構成は、右隻の右端から順番に展開する変遷のストーリーに対し、左隻は全体として表現しているため全体の展開が分かりにくい、左隻についても屏風の構造を生かした展示形態により、平面的に開いた状態よりも場面の区切りが強調されたことで緩和されている。

作品から受ける印象と論文の文章や言葉のイメージに、共通して魅惑的な雰囲気や纏い統一感があり、衰退に向かう「ふたかた」の染色文化と本人のテーマが複雑に交差する作品である。今後は、より一層特に表現において高い次元での作品制作に期待する。

（総合審査結果の要旨）

山田麻緒氏の制作研究の根幹には、「女性＝乱調な幻影」という女性観がある。特有の女性の形成には、精神障害を持つ実姉の存在が深く関わっている。幼少時からの母親を含めた女性同士の三角関係は、自身の精神を形成する過程に大きな影響を与えている。

殴り描きの発達過程（オリジナルキャラクター「くみちゃん」の創作）、その後の10年間の日記は、家族からの逃避、親密性の欠落から生じる自己防衛的な保身の行動とも受け取れる。

しかし、そのことが成長に伴う教育や社会環境の変化によって、文字では書き起こすことが難しく言葉として口に出すことが憚れる情動や思考を、型染めによる染色作品で表現する創作活動へと結びついていく。型染めの型紙を切る（彫る）行為も山田氏にとっては「くみちゃん」の殴り描きや日記と同様の意味合いを持っている。

Complex(複合的な感情)、女性、半獣人をキーワードとして、初期の作品は型を複数重ねる手法と、透過性のある生地をレイヤー的に重層させることで女性の脆弱性、幻影性を表現しようと試みている。しかし、複雑に組み合わせられた要素がお互いの効果を減少させる結果となっている。情感的な内容を表現するには直接的な描写行為の方が適している。型を切る行為は氏にとっては直接的な行為であるが、糊を置くことで間接的な表現に変換されてしまう。形態の持つ特徴を明確に見せながらフォルムを中心に再構成し、キーワードに添った表現を可能にする方向への転換は「制約の中から生まれる美」に近づくものである。

山田氏は「ふたかた（二型）」の伝統技法である「高砂」染めに出会い表現のみならず社会的な背景、フィールドワークも含めて詳細なリサーチを重ねている。消失した伝統と個人の創作が交差する中で生まれる革新的な型染め作品を提案することが本論文の研究テーマと述べているように、「高砂」染めによる型と自身の型の表現に対する相違についても考察を重ねている。また、女性の髪を「生」と「生ならざるもの」の世界の両方に位置する両化的な身体部分と捉えることによって、二型染色技法と具象表現の融合による独自性と新規性のある作品を研究している。

博士審査作品において、「Acinonyxes」をテーマに、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」を検証し、日本人の美意識と個人的な「翳り」をキーワードに制作した。人物のフォルムや画面構成の追求が望まれるところであるが、二型染色技法を十分に生かした独自性を有した作品となっている。氏のこれからの社会環境による精神の変化とともにさらに高度な論文研究と作品制作が期待できる。よって、審査員全員で「博士（美術）」の学位にふさわしいと判断した。